八尾市教育センター所報

令和７年６月
４１０号

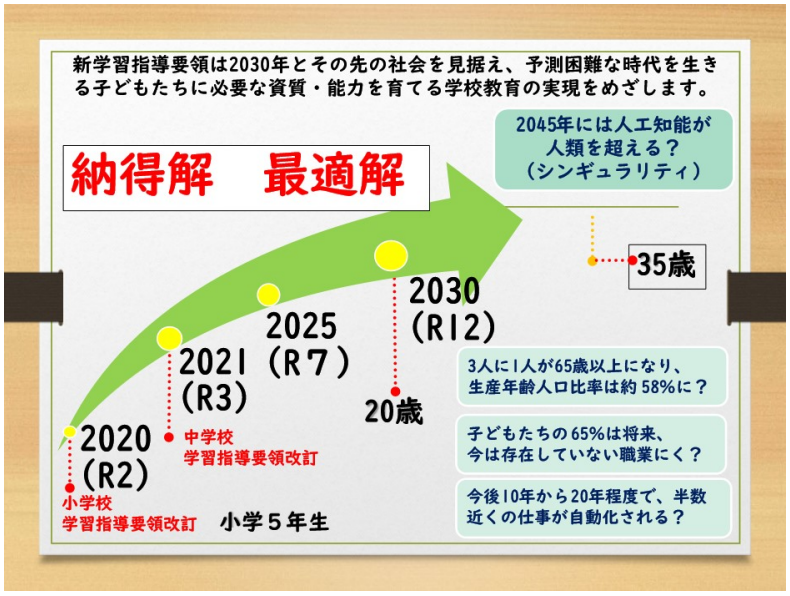
相談支援係
072-941-3365

ICT教育推進係
072-943-5785

研究研修・幼児教育係
072-943-5784

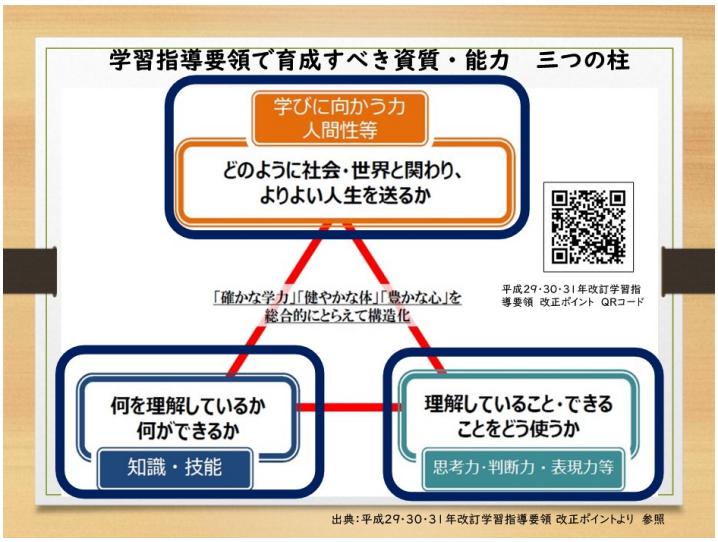
教育センター
Web page は
こちらから

初任者・新規採用者研修 ③



令和７年５月８日（木）午後３時～午後５時に初任者・新規採用者研修③をリアルタイムWeb研修で行いました。講師は本センター　生田祐敬　指導主事で、研修テーマは「セルフマネジメント　・学習指導要領に基づいた授業づくり　・学習指導案の作成　・児童生徒主体の授業づくり」です。

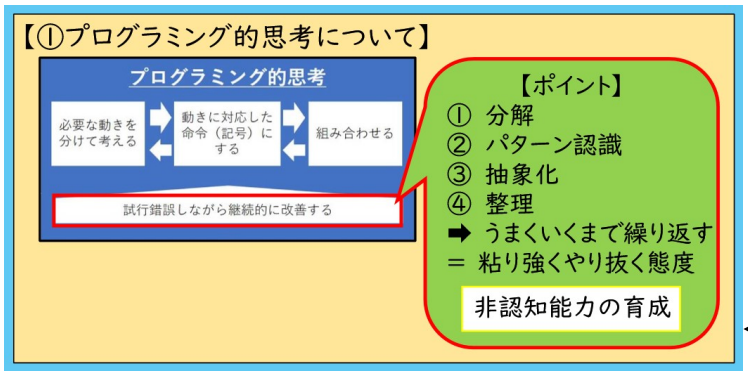
←研修使用資料
↓



＜受講者感想＞

- 分かりやすく伝える力をより身に付けていかなければならないと思った。私は現在小学２年生の担任をしているが、１か月が経過して、言葉の選び方に悩むことがある。日常的に使っている言葉が子どもたちにとっては分からない言葉だったということが非常に多い。どれだけ良い授業を行ったとしても言葉が伝わっていないことで理解度は急激に下がってしまう。そのため、各学年に適した言葉選びを考え、分かりやすく伝えていきたいと思った。
- 低学年は分からない単語が多いため、言い換えるための引き出しがたくさん必要であると思った。また、自分の中に十分な語彙力がないと言い換えることが難しいため、学び続けることの大切さを感じた。
- 導入の大切さを改めて感じた。自分が授業をしていく中で、導入が十分とは言えない場合がある。しっかりと子どもたちが興味のわくような導入を考えようと思う。その際、身近なものに例えたりするなど、しっかりとした工夫をしていきたい。
- 今の自分は順番とか関係なく、毎日の業務をこなすことに精一杯のため、正直非効率的に動いていると思います。そのため、やることリストなどの作成で見える化し、さらに優先順位をたてて効率的に動いていけるようにしたいと考えました。

プログラミング研修①



５月１６日（金）午後３時３０分～午後５時にプログラミング研修①を行いました。講師は本センター　戸田　智規指導主事と　渡辺　愛理　八尾市 ICT 支援員で、研修テーマは「プログラミング、アンプラグドプログラミング教材を活用した授業づくりについて」です。

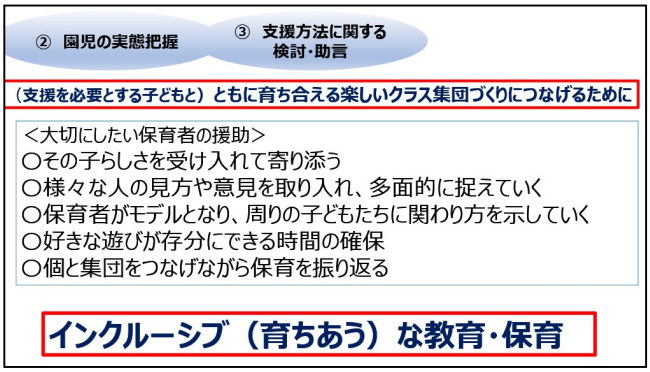
研修使用資料

＜受講者感想＞

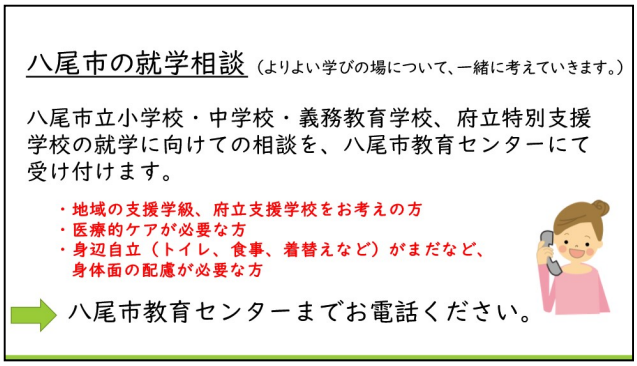
- プログラミング的思考について、改めて確認することができた。その特性をいかした授業づくりについて考えることができた。特に思考過程で、焦点化やカテゴライズ等、多角的に事象を捉えていくことが有効だと感じた。今後の授業実践に効果的に取り入れていきたい。
- アンプラグドプログラミングの防災プログラミング学習は大変参考になった。所属校では７月に不審者対応訓練を行う予定なので、その事前学習として「不審者対応プログラミング学習」を学年で行うことができないかと思う。生徒自身が自分の身を守るために不測の事態に自分の行動を見直すことができるのではないかと思った。
- 今年度の技術科の重点課題は「日常生活との関わりを考える」であった、生活の過ごし方をプログラミング的思考で考えるのが教科課題に合っていると思うので、さっそく使ってみたい。

幼児教育研修
＜特別支援教育コーディネーター研修（就学前）①＞

令和７年５月８日（木）午後３時～午後５時に幼児教育研修＜特別支援教育コーディネーター研修（就学前）①＞を八尾市立青少年センター３階集会室１・２で行いました。前半の講師は本センター　天野　千晶　所長補佐で、研修テーマは「就学前施設における特別支援教育コーディネーターの役割について」です。後半の講師は本センター　吉原　佑輔　指導主事で、研修テーマは「気になる子どものスムーズな就学に向けて」です。



↑研修使用資料（前半）

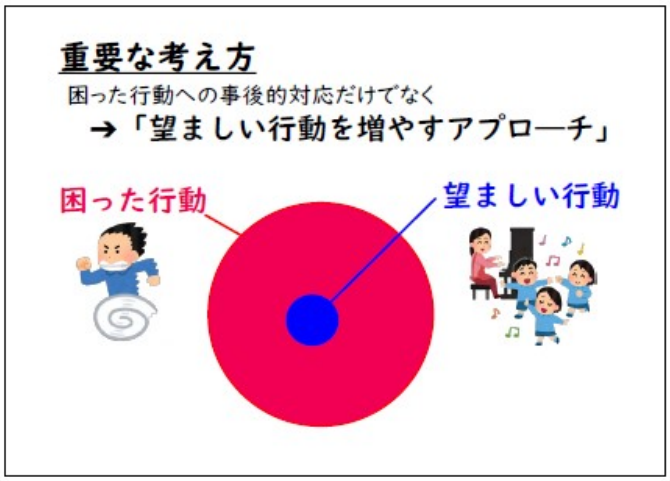


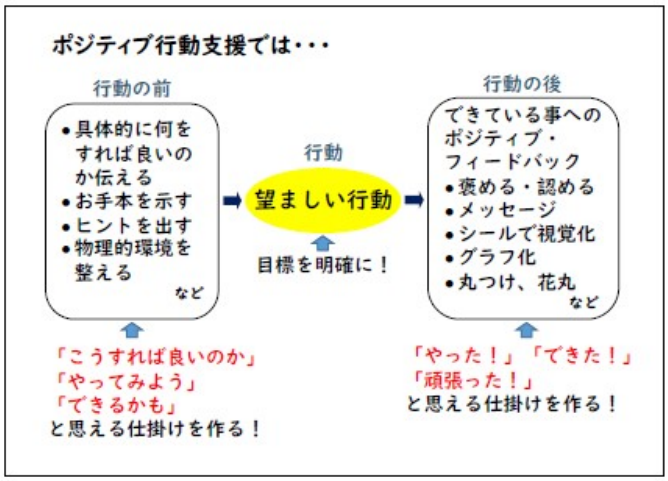
↑　研修使用資料（後半）

＜受講者感想＞
・本日の研修で学んだことを持ち帰り、園内研修の質を高め、その成果を全員で共有し、日々の保育に活かしていきたい。
・インクルーシブな保育は、保育者の考え方次第で変わるということが分かった。研修で多様な支援方法を学ぶことができた。
・小中学校の通級指導教室で、自立活動をどのように行っているのか、よく理解することができた。
・就学相談の実際がよく分かった。保護者が支援学級や支援学校を視野に入れている場合に進めるべきものであることが納得できた。

幼児教育研修＜特別支援教育・保育研修①＞

令和７年５月１９日（月）午後３時～午後５時に幼児教育研修＜特別支援教育・保育研修①＞を八尾水道センター４階大会議室で行いました。講師は　大阪教育大学　庭山　和貴　准教授で、研修テーマは「行動観察のポイントと特性に合わせた支援　～子どものありのままの姿から見えてくる手立てとは～」です。



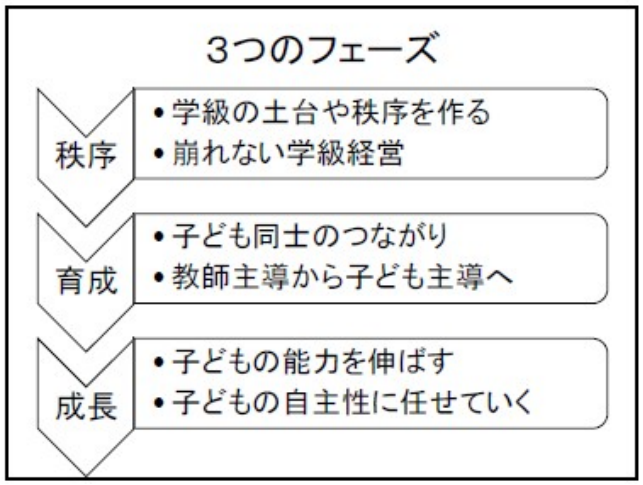


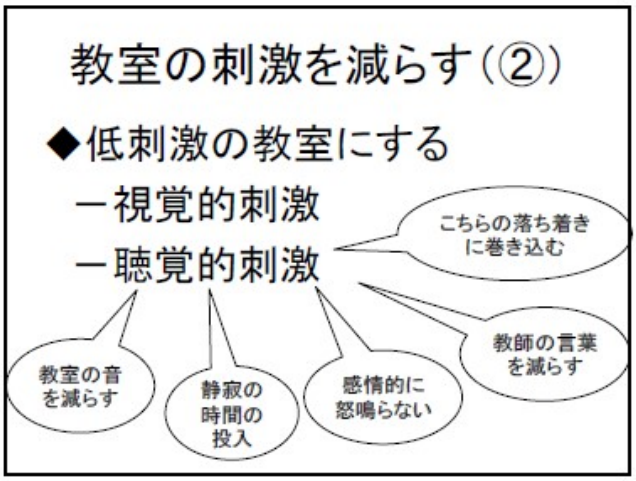
研修使用資料

＜受講者感想＞
・ポジティブに行動支援をすることの大切さを、グループワークを通じて実感した。マイナスの声掛けや指摘ばかりされると、子どもにとっては大きなストレスになってしまうということがよく分かった。
・困った行動について、望ましい行動を考えるということを十分意識できていなかったことに気づかされた。“こうすればよい”ということを具体的に伝え、スモールステップでも、できていることを認めていくことが大切であると分かった。
・ポジティブ行動支援のアプローチの仕方（①目標を明確にする　②環境づくり　③フィードバック）はカリキュラム作成の話し合いの中でも活用できると思う。

２年次研修（令和６年度初任者研修第２０回）

令和７年５月 22 日（木）午後３時～午後５時に２年次研修（令和６年度初任者研修第２０回）を行いました。講師は桃山学院大学　松久　眞実　教授で、研修テーマは　人権について考える４　～児童生徒理解を深めるために３～「1 年間を見通した学級経営の道筋」です。研修の終わりに本センター　生田　祐敬　指導主事より「社会体験研修について」と「全国教職員研修プラットフォーム Plant について」と題して説明を行いました。





研修使用資料

＜受講者感想＞

•言葉を減らすことが重要であるということを再確認した。授業をするとき指示を出すときに、なるべく端的に伝えるように意識をしてきた。しかし、１ 年生の担任をすることになり、短く確実に伝えることの重要性を強く感じている。講義の中で、「言葉を短くする分、ジェスチャーを使うとよい」というアドバイスがあり、実践してみようと思う。

・教員になって２年目とはいえ、学年がかわり、子どもがかわると、うまくいかないことが多い。悩んでいる。しかし、今日の研修で解決策の糸口が見いだせたように思う。

・子どもを叱るとき迷いがある。子どもの言葉を上手く広げたり、適切な言葉で返したりが苦手である。うまくいかないときは学年の先生に助けていただいてる。叱るポイントを年度始めに子どもたちに伝えてはいるものの、その基準の定着や、その場で素早く叱ることなどが出来ていないと思う。やってしまったことについて長々と話してしまう傾向がある。素早くピシッと指導し、その後フォローすることの重要性と方法を学ぶことができたので、明日から実践していこうと思う。

幼児教育研修＜管理職ステージ研修＞

令和７年５月２６日（月）午後３時～午後５時幼児教育研修＜管理職ステージ研修＞を八尾水道センター４階大会議室で行いました。講師は性と人権の講演家　吉川　ヒロ　さんで、研修テーマは「みんなちがってみんないい　はじめの一歩　～性と人権を考える～」です

＜受講者感想＞

・子どもは、それまでに見たり感じたりしたことをものさしにして、ものごとを考えたり判断しているようだ。自分の経験以外にも多様な考え方や価値があることを伝えたり、考えさせたりできるように日常の言葉がけの大切さを感じていきたい。

・性別にとらわれることなく、一人ひとりが人間として認められ、個性を大切にしていけるよう、先入観を持たずに子どもたちと接していきたい。

・「何もかもできない」けど「何かはきっとできる」という言葉が胸に響いた。職場でも伝達し、これからも子ども一人ひとりを大切にしていきたい。

教育センター「情報公開コーナー」

教育センターＢ棟（東側）の２階に「情報公開コーナー」があります。各種教育関係図書・雑誌等を配架しています。もちろん「教科書センター」として八尾市で採択している教科書や他社の教科書もあります。研修等で来所された時に直接ご覧いただければ幸いです。教科書・その他書籍・雑誌等も２週間の貸し出しを行っております。今回は５月から６月に配架した雑誌の誌名と目次の一部と書籍の内容を紹介いたします。

「指導と評価」（日本教育評価研究会）６月号
・特集１　認知能力に配慮した教育
・特集２　IT 時代に本を読む

２４ページに「IT 時代の読書を考える」と題して帝京大学教育学部　鎌田　和宏　教授が寄稿されています。「読書離れ」とりわけ子どもの読書離れは進んでいるそうです。一か月間にまったく本を読まなかった回答者が、小学生で 8.5%、中学生で 23.4%、高校生 48.5%と年齢が上がるつれて増加傾向にあります。大人はというと、一か月に一冊も本を読まない人が 62.6%だそうです。「読書」とは「ひまな時」に読む「文学作品」との認識は一般的にあるのかもしれませんが、現代社会においては「問題解決のために情報を得ることは必須」であり、教科書を読み解く読解力が必要です。しかし、小中高校生はそれすらできていないとの調査もあるそうです。では IT 時代の読書はどうあるべきか、これについては鎌田氏も委員として参加された「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」についての通知（文部科学省）を紹介されています。第一に「不読率の低減」があげられています。これを推進するためには紙の本だけではなく「１人１台端末」なども有効に使うべきとの意見が強く出されているそうです。また、２０１９年に出された「読書バリアフリー法」では「障がいのある人、異文化に背景にもつ人等」にも読書の機会提供することが推奨されています。紙かデジタル化との論争もありますが、それぞれのメリット、デメリットを勘案したうえで、「読書」を推進していくことが必要です。　（葭仲）

４０ページに言語技術としての「事実と意見」の区別⑮　歴史学・歴史教育における＜事実＞とは　と題して北海道大学文学研究院　橋本　雄　教授と文部科学省　渡辺　哲司教科調査官（体育）が対談形式で寄稿されています。＜事実＞の反対側には＜意見＞があります。中間的なものとして、物理的事実ではないけれど「人々の解釈と合意」によって“事実”とみなされる「みなし事実」があります。それぞれの境界は、かなりあいまいな場合があります。橋本氏は中・高向け歴史教科書の執筆・編集に携わっておられます。教科書の記述では「意見（推論）」は使われることは少ないとのことです。「歴史学」は「意見（推論）」を許容している部分があるにもかかわらず、教科書では事実上禁止されています。この不条理は授業をする先生にとっては都合がいいのかもしれません。ただ、橋本氏は、それを全面的に肯定されているわけではありません。中学校の教科書に出てくる「倭寇から勘合貿易へ」のストーリーは視点を変えると違う事実が見えてきます。「倭寇と日本の正式な使いを区別」するために勘合の制度を始めたのではなく、民国はそれ以前から日本以外の国々と外交関係があり、勘合を使って使者の真偽を見極めていたからです。では、なぜそのような記述になるのかというと、学習指導要領に“日本史中心”との縛りがあるからだそうです。話は「歴史学と文学の境界線の話になります。歴史学は「先に解釈・意見があって、後からその根拠となる事実を史料の中に見つけていく」という営みで、「意見の中に事実を紛れ込ませる」と述べておられます。では文学はというと、渡辺氏が「小説家は事実の中に意見を紛れ込ませる」ことだという入部明子氏の言葉を紹介されています。小説家はあえて事実と意見を区別できないようにしている場合が多いというのです。最後に、歴史学（者）は科学（者）であるということが述べられています。自然科学も、まず理論があり後に実験や観察によってそれらが証明される。湯川秀樹氏の中間子の発見やダーウィンの『種の起源』の執筆などを例にあげておられます。　（葭仲）

「道徳教育」（明治図書）６月号
・特集　考え、議論する道徳に変える　新板書パターン集

「特別支援教育研究」（全日本特別支援教育研究連盟編集・東洋館出版社）６月号
・特集　やってみよう！楽しく学ぶ「理科」

「初等教育資料」（文部科学省編集　・東洋館出版社）６月号
・特集Ⅰ　豊かな人間性を育む学校同士の連携・交流
・特集Ⅱ　[外国語活動・外国語]デジタル学習基盤の活用による「話すこと」における資質・能力の育成

「中等教育資料」（文部科学省編集・学事出版）６月号
・特集　生成 AI 等を活用した授業実践

教育科学「国語教育」（明治図書）６月号
・特集　見るだけでうまくいく板書パターン大全

なぜ今板書なのか？
明治図書から出版されている３種類の教育雑誌（道徳・国語・社会）が共通して「板書」を特集しています。なぜ今「板書」なのでしょうか。１人１台端末が配備され、教室には大きなディスプレーが配備されてります。これらを効果的に活用すれば「板書」はいらないという考えもあるかも知れません。これについて、「国語教育」の６ページで山梨大学大学院　茅野　政徳　教授が［提言］「授業における板書の役割　ーNEXTGIGA の板書術　変えてよいこと、悪いこと」と題して寄稿されています。
・「書く」にまつわるエトセトラ
子どもの「書く力」は低下しているとのことですが、大人である教師も「書き言葉」から「打ち言葉」に移行してきているそうです。最近ではスマホをフリックしてレポートを作成する学生もいるという話も紹介されています。そんな時代に、大学の授業で学生に板書させると小さく薄い文字を刻むことが多いそうです。
・板書の功罪を見つめ直す
教師が板書するのは、「情報を理解する際、聴覚優位より視覚優位の子どもが多いといわれている」からだそうです。また「授業とは教師と子どもが生み出す一回性のドラマ（発言内容等）であり板書はそれを記録に残す役割があります。そんな板書には「教師の個性や心情」が現れ、子どもにも伝わります。板書のマイナス面としては、「子どもの発言の中で、適切な言葉を抜き出して板書している教師が少ない。」とのことです。「中核」ではなく「枝葉」を板書してしまっているそうです。マイナス面の二点目は「多くの教師が「色チョーク」に鈍感であるということです。
このあと茅野氏は時系列板書と構造板書を紹介されていますが、最後に「変えてよいこと、悪いこと」と題した文章で締めくくっておられます。「情報機器の利用は手段であり、目的でないということを忘れてはならない。」と述べられています。ＩＣＴに頼り切って「机間指導をしない」「板書はしない」そんな教師が増えたのではないかという感想も述べられています。黒板を使ってもＩＣＴを使っても、授業が子ども中心で展開するドラマであるならば、そこに子どもの意見が反映されないということはないはずです。「なぜ今板書なのか？」という問いに対しては、これが茅野教授のお考えのようです。　（葭仲）

教育科学「社会科教育」（明治図書）６月号
・特集　授業が見える！　社会科「板書づくり」実践ナビゲート

「新しい算数研究」（新算数教育研究会編集・東洋館出版社）６月号
・特集　算数の教材の本質を探る

書籍：『新版八尾市史』　考古編２（八尾市）

　車で外環状線（国道１７０号）を柏原市側から北向きに走ると、JR 大和路線の陸橋を過ぎたところの左側に由義寺跡という文字が彫り込まれた茶色の大きな石が見えます。「ゆげでら」と読みます。『新版八尾市史　考古編２』には、「由義寺は奈良時代後半に女帝称徳（しょうとく）天皇と法王であった道鏡（どうきょう）により造営されたと考えられる古代寺院です、『続日本紀（しょくにほんぎ）』に寺名が記されており、文献資料からはその存在が確実視されていました。」との記述があります。このまぼろしの由義寺の塔基壇が平成２８（２０１６）年に発見されました。一辺の長さは約２０m の正方形で、東大寺東西両塔の一辺約２４mには及ばないまでも、それに次ぐ大きさだそうです。八尾市のホームページによると、平成２９（２０１７）年には国史跡に指定されました。これは、八尾市では「心合寺山古墳」「高安千塚古墳群」に続いて３件目だそうです。　（葭仲）

由義の宮（769～770 年）
書籍：『孝謙・称徳天皇物語　女帝の手記』１～４巻　里中満智子　著（中公文庫）

　由義寺を造ったのは称徳天皇ですが、孝謙天皇とは誰でしょう。実は同じ人物です。孝謙天皇はいったん退位し上皇になりますが、再び即位して称徳天皇となりました。この辺の時代を、フィクションを交えて描いたのがこの作品です。歴史的事実だけを並べたものではありませんが、当時の政治状況や事件等について大まかな理解ができるかもしれません。
（葭仲）

書籍：『物語八尾の歴史　―２万年のストーリー―』　（八尾市）

　この本は『八尾市史』をベースに八尾の歴史についてわかりやすく書かれています。また、日本全体の歴史の流れにも触れられており、八尾の歴史散歩　ガイドブックと呼べるものだと思います。そ３０ページに「幻の西京と弓削道鏡」のテーマのもと、「八尾は平城京に次ぐ副都になった」とのタイトルで道鏡の成功と終焉を描いており、足利健亮氏による西京域推定図も掲載されています。奥付には、2016 年３月 31 日第２版発行とあります。まさにこの年、まぼろしの由義寺の塔基壇が発見されました。　（葭仲）